

# ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究：音声編

末 延 岑 生

はじめに

英語の“king”は、古くは日本語の「キ・ン・グ」のように発音していた。ところが現代英語の発音はスピード時代と相まって、最も明瞭なはずの母音が弱くなり、ついには一部は消えて今では「キ」か「キン」くらいにしか聞こえなくなった。このようにして母音よりも子音が多く用いられるようになると、子音の連続音が増加して明瞭度を下げ、さらには文や語の最後は口を閉鎖し、口中で発音を終わらせるなど、英語はまぎらわしい乾燥した音声になっていった。

これに対してこの一世紀の間に、日本文化と日本語を土台にして醸成されてきた日本人が常用する「ニホン英語 (*Open Japanese*)」は、豊かな母音と明瞭な音節を持ち、日本語の性格をそのまま引き継いで、国際英語として世界で使われている。ところがこの特徴を無視し、英米英語を完璧なまでに真似させているのが今の日本の英語音声教育である。

本稿は一連の「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究」の一部を成す音声編であり、他は形態編、統語編(語順)、統語編(時制)としてすでに発表した。「ニホン英語」とは「日本語体系および日本人の生活体系が内在する、日本の文化とともに歩む英語(末延 1991)」である。今まで筆者は「ニホン英語」の形態および統語、中でも語順、時制が古代からの素朴な英語と類似していることを一貫して指摘してきたが、本稿でも英語の歴史の中で音声がどのような発声から始まり、それらがいかに変化してきたか、そしてそれが「ニホン英語 (*Open Japanese*, 以下適宜OJと略す)」の本質と音声面、中でもアクセント、音節、個々の発音においてどのようにかかわっているかを指摘したい。

人は天与の財産であることばをどのように使ってきたか。たとえば今や20億人に使用される英語は、世界の人々の生活用具として使われているが、本来コミュニケーションの道具であるべき英語のための教育は、日本ではその利便性、実用性ととともに、商業主義や生存競争のための道具としても使用されてきた。そんな中で言語の本質を極めようとしてきた言語学、なかでも文法学や音声学の努力の成果は極めて広く深い。しかしともすれば緻密さをいよいよ深める最近の音声学・音韻論の成果が日本の英語教育の中に思いのほか深く浸透し、誠実に学ぼうとする意欲ある人々の要求とは裏腹に、実はむしろこうしたアカデミズムの皮相的な部分にとらわれてきたのではないか。そのことを見極め、改善するた

めにも、本稿では主に言語教育学の立場から検討したい。

そこでこの一世紀を振り返り、その間に内外で英語の音声面での教育がどのような仕方  
で発展を遂げてきたかを探り、その変化を参考にしながら国際社会における「ニホン英語」  
の位置づけをしておきたいと考える。本来は最も民主的、前進的で機会均等であるはずに  
もかかわらず、現実にはいまだに因習的で画一的、封建的な日本の学校の英語の発音教育  
に一石を投じ、いかに方向性を見失った非効率的な音声教育がなされているかを検証する。

本稿は主にロンドン大学の音声学教授 D. Jones の高弟であった A. C. Gimson、米語音  
声学の J. S. Kenyon、および日本人のための英語音声学研究の藤井健三ほかが、それぞ  
れの著書で指摘してきた英語音声教育の観点を土台として論を進める。

## I. どんな英語音声適切か—さまざまな観点

ことばは人が使うものだから、本稿の主体は当然人間である。とはいえ英語を使うから  
といって英米人でもない。ここでは主体は英語を使う日本人である。しかも英語を母語と  
しない、英語のネイティブ・スピーカーではない日本人である。

では日本人が英語を使う相手は誰か。現在地球上の約20億人が英語を使うといわれるが、  
英語だからといって相手は5億人を擁する英語国民とは限らない。近隣のアジアをはじめ  
ヨーロッパ、アフリカ、南米といった世界諸国には、15億人もの英語を使う人々がいて、  
その数は増え続けている。

次に日本人はどんな英語を使えばいいか。それは英米英語とは限らない。そこでは「イ  
ンド英語」「中国英語」「アジア英語」「アフリカ英語」というように各国、民族の文化言  
語に基づいて生まれた独自の英語を使う。本稿では日本人の立場を主体にして、日本人に  
はどんな英語が適切かについて論じるが、前述のように日本には1世紀も前から日本人独  
自の英語が培われてきた。それが「ニホン英語」である。

さて、人間のしゃべりことば、言語音、すなわち音声とは、言語の一般的特長である線  
条性に基づいた「音質、音調、音の長さ、ピッチ、そして強弱が絡み合った連続体」とい  
えよう。これは地域、人種、文化がそれぞれ違っていても共通する土台であって、互いの  
発音の種類が違っていても、せいぜいその微妙な度合いの違いに過ぎないだけのこ  
とである。ここでは日本人が世界の人々を相手に英語を使う場合、どんな発音がふさわし  
いか。これまでのさまざまな観点を見て行こう。

### 1. 伝統的観点

ことばを独創的に駆使する天才、シェクスピアのような自由奔放で大らかな人々の時代

が過ぎて18世紀にはいると、英語を洗練し、規格化し、固定してそれを「モデル」として使わせようとする言語学者たちが台頭してきた。英語史学者 Baugh, A. C によるとそれは「強力な秩序感覚と規制の尊重とそれに対する服従」を強いるものであった。正しい英語の規範を構築するという反面、言語学の暗黒時代というべきもので、当然音声に関しても同じ傾向にあった。

しかしことばの本質をゆがめるそんな時代を潜り抜け、言語学、音声学はいま、当時と比べれば極めて自由で民主的な環境のもとにあると言っていいだろう。ところがいみじくも Kenyon, J. S. (1951) はいう。「教養人はすべて同じ発音をしていると実際に思っている人はおそらくいないだろう。しかし、自分の住んでいる以外の地方の教養人の発音にけちをつけたり、あるいは礼儀をわきまえて口には出さないが、内心馬鹿にしていることが多いのが普通である。」

ところで文部科学省が指導する日本の英語教育の伝統的基盤は、英語の元祖はイギリス英語・アメリカ英語であるからそれは不変な「モデル」であるとし、そのための教育はこの「モデル」から離脱してはならないという思惑から成っている。そしてこの考え方は当然多くの言語学者、英語教師が支持してきた。

こうした日本の英語教育の現状をよく著していると考えられる書物(山田2005)には、その終章で結論として「我々はどんな英語をモデルにすればよいのか。これまで我々の手本は、イギリスの英語であり、アメリカの英語であった。これからは、何か別なものを手本にしなくてはならないのだろうか。…結論から言えば、これまで通りで一向に構わない。…我々が手本とすべき英語は、これまで通り、イギリスの英語かアメリカの英語、あるいはその混合版でよい」と述べられている。

## 2. 情感的観点

小栗敬三(1969)は「きれいな正確な発音が私たちの学習の対象である」といい、Kenyon は「強勢のある音節とない音節の相互関係を乱すのでは、決してより明瞭な発音やより美しい発音は望めない」という。この「きれい」「美しい」というのは英米人が発する音声として日本人の脳裏に刷り込まれており、聞き手にはたとえ聞きづらくても、美しければいいという音声芸術の至上主義的な観点である。これも日本の音声学、教育者たちに多く見られる考え方で、こうした形容表現は、日本の商業主義化した英語教育の中で「ネイティブ・スピーカー」とともに最も効果的なコピーとなっている。また Kenyon は、「最良の発音とは聞き手によって意識されることのないような発音なのである」というがこれは英米英語を目標とする文部科学省の考えと共通するので後述する。

### 3. 言語科学的、計量的観点

音素とは音声的に類似しながらも対立的分布をなさない音の類で、語の意味を区別するのに役立つ。一般的には英語の母音音素は13あるといわれるが、Gimson は短母音7つと、長母音13の合計20の音素があるといい、さらに英語を学ぶ際、NNSE (Non-Native Speaker of English) の音素選択の仕方もNSE (Native Speaker of English) と同数(つまり20の母音と24の子音)でなければならないという。ところが Kenyon のように、英米音ではたとえば [e] [e:] [ei] [ei] の母音はすべて同一音素に属するとする。英語ではこれらを入れ替えても異なった語になることはないからである。

それに音素がその役割をまったく果たさないことがある。たとえば *rite* と *right*、*write* と *wright* のような同音異義語の場合、これらは文脈と環境によらなければ発話者の意図がわからない。これは音素が音声区別のすべてではないことを示しているのだが、こうして音素数の多いほどその言語は高度だという流言がはびこる。そのからくりとして、特殊な単語が生まれるたびに音声学者はそれに応じて音素数を増やし、学習者に驚くべき多くの重荷を負わせておいて、結果として商業ペースに乗せるという悪循環を担っている。しかし各音の違いをその特徴で捉えると、たとえば [b] は oral, [m] は nasal となり、これだと12種類の特徴ですべての発音が表わせる。

それより身近なところで小栗が指摘するように、たとえば疑問詞の *wh* 音は [h] を発音するので *which*、*witch* が区別できる。イギリスでは [h] は発音されないが、*who* *whose* *whom* の [h] は発音する。また Kenyon によると [hw] と [w] を区別して *whether*、*weather* を区別するアメリカ人が多くアメリカ標準語となっている。OJ (*Open Japanese* ニホン英語)も同じく丁寧に区別することをその原点としている。

### 4. 社会言語学的観点

言語は社会的な産物であるから、それぞれに見合った社会の中で使われてこそ、その意義が発揮される。Jones, D. (1932)をはじめ多くの音声学者は、ある一つの発音形式を取り上げてこれを標準形とすることは早計で、発音の絶対基準というものはないといい、またある共同社会で一般に認められた社会伝統を有し、それを代表しているとみなされる人々の間で通用している発音は、標準的といっている。

そこで Kenyon (1951) は「どういう場合にどんな条件のもとで正しいのか」を考え、正しい発音は一定のものではなく、時と場所と場面に応じると結論づけている。話し相手の理解程度、話す対象、そしてさらには現代の国際英語時代の観点からすれば、NSE (Native Speaker of English) 同士や NSE 対 NNSE (Non-Native Speaker of English)、それに NNSE 対 NNSE のコミュニケーションでは、事情が変わってくることを予言してい

る。この示唆は当時の音声学の社会言語学への参入への第一歩を示すものであろう。

## 5. 自然に個性をという観点

文字であれ、音声であれ、手話であれ、誰が何と言おうと自分のできる範囲の中で自然にコミュニケーションをとればいい、人がとやかく言うべきものではないという考えがある。Kenyon はいう。「音声学を学ぶとまもなく、自分と違う発音を非難することを慎み、そういう発音を予期し、敬意をこめた知的な興味を持って聞くようになる。自分の聞いている発音を、言語の発達と行動についての、自然で規則だった法則と関係づけることができるようになる…。よその言葉に対する態度という点で心が広くなるばかりでなく、言葉の用法の権威とか標準という問題についても見方が理性的になる。…それを用いるときどれにするかは個人が決めることである」と。

確かに全て個人の自由でことばを使っていいということになれば、ことばの存在が危うくなり、ことばとして矛盾するだろうが、人は自分の風貌や体格など、服装など裸ならともかく、他人からとやかく言われたくないのと同様、よほどかけはなれたものでない限り自分の発音のくせや方言などに対して他人にとやかく言われたくないものである。所詮個人の心の自由の問題ということになろう。音声面のみならず言語学習全体の根本理念がここに記されている。

さらに Gimson (1980) は「ネイティブと同じ運用能力を身に着けようとすることに特に大きな利点もないと思っている人、自分の外国人としてのイメージをはっきりと残しておいた方が得策だと思う人もいる」という。外国語学習におけるこうした個性の尊重はすでに半世紀以前から提唱されてきたことだが、日本では全く生かされないどころか、21世紀を迎えてさえ、英語教育者や音声学たち自身の手で厳しいブレーキを掛け、むしろ逆方向を突っ走っているように思える。

本稿では主に本章の第4、第5の観点から言語、コミュニケーションの本質にせまりつつ、日本における英語教育の音声面でのあり方とともに、OJ (*Open Japanese* ニホン英語) の存在意義を述べることにする。

## II. 音声学の方法

### 1. 日英語の比較対照

Henry Sweet (1908)、Daniel Jonesをはじめ多くの音声学たちは、NNSE が外国語を学ぶ場合、自国語の発音や文法が干渉し邪魔をするからそれらを完全に除去せよという、まるで大英帝国の植民地政策の一環として英語発音に忠誠を誓わせるために、自国の汚物

をさっさと処理すべきというような negative な面を再三指摘してきた。しかし C. C. Fries (1954) をはじめ Gimson などは、母語と英語の発音を比較対照させて、より効果的な発音法にせまろうとして、学習の最優先事項として、「学習者の母語に存在しないような英語の特徴を集中して教えるべきである」と提案した。

そのためには発音の trouble spots (間違いやすいところ) を見つけることが大切で、それにあたって高本捨三郎 (1965) は、誤音代用 (replacement) または distortion (曲解) が生じるであろうと思われる項目を数え上げたところ、「大まかに分ければ110項目ほど」になったという。確かに効率的に思えるこの方法だが、これだけ多くの項目をただ単に効率的ということが先頭に立って、学習者の負担や心理を考えず、“一番難しいことを最優先して教えること”を推奨することは、初学者に初めから一番の難問を突き付けることになったが、たとえこれを完ぺきにしてもまだまだ不完全な発音とならないだろうか。

しかし高本は「日英発音の比較の仕方は、あくまでも英語の音体系の記述が主であり、日本語の音体系は、英語音の記述の枠内の適宜の場所にあてはめられるに過ぎない。つまり、英語音の体系を主軸として、それと並行的に日本語音のうち、対応・近似・対立または固有の諸音を探し求め、ならべてゆく」という。つまりあくまでも英語音が主体で、その中に日本語と似たものを当てはめて行く。近づけるのではなく、代替、置換、対立、対応、近似を探すべきだと考えた。

ところがどの言語同士でもそうだが、日・英語の間には相違点よりも互いに共通する、または近似する部分がある。だから筆者は立場を変えて、相違点よりもまず母語である日本語発音を主軸(ピボット)とし、続いてそれに共通するかあるいは類似する英語発音に注目する必要があるのではないかと考えた。

人は一般に外国語を学ぶとき、学習者側の立場にたてば、目標となる外国語の発音がどんなものか最初は全く面識がないわけで、取りつく基準がまったくない状態である。だから、逆に学習者が生まれた時から親しんできた母語の日本語発音をピボット(主軸)として、そこから当該外国語の発音を当てはめて行くという方が自然だろう。

本稿ではこのように英米英語でもなく英米人でもなく、まず国際的に通じる英語を学ぶ側の日本人学習者と、その母語に第一に焦点を当てるとするこの観点から、現に使用されているニホン英語の発音をピボットとして重視し、その通用度を計測し、通用しない部分があればそれを改善し、また歴史的に発音の変化を見ながら、通時的な立場から英語発音の容認度を測るという方法をとる。古い英語の時代であればあるほど、ニホン英語の発音はよけいに十分に通じただろうからである。

## 2. 学習目標のレベル設定

Gimson は NNSE の運用能力の目標は二種類あっていいとし「高容認度(外国人だと気付かないほどの英語力)―High Acceptability」と「最小一般了解度―Minimum General Intelligibility」に分類し、特に後者について「外国人学習者は英語を人工的につくられた環境の下で、途切れ途切れに学習するのが普通なので、ネイティブ・スピーカーの聴取能力や発表能力の水準近くまで達することはまれである。実際のところ、それほど高い水準を目標にする必要があるのは極めて例外的であるといってよい」とした。

続いて Gimson は NNSE の運用能力の目標条件として達成度を低く定めた場合、「NSE の音の脱落や同化の習慣を真似しようとする必要は全くない」といい、NNSE がそのようにして学習した英語は、「極めて人工的あるいは外国語のように聞こえるにしても、NSE にはおおむね理解できる。NSE がこれを聞く場合、自分自身とかなり異なる地域方言を用いる同母語の話し手の話聞く場合とまったく同様に、自分が身に着けている解釈習慣を調整することが必要だろう」という。

Gimson (1980) はさらに NSE としての自らの立場から、NNSE に対し次のように述べている。「英語のネイティブスピーカーは、たいてい著しくかけ離れたほかのタイプの英語を聞き取ったり、理解したりすることについてもかなりの能力を有しているものである。」

こうした心ある音声学者の NNSE 達への理解ある提言は、すでに半世紀以上以前から口を酸っぱくして行われてきているが、日本の英語教育の目標は漠然としてまだその区別すらない。しいて言えば Gimson の提案する「高容認度」を目指しているようであるが、これは Gimson も指摘しているように極めて例外的に高度な水準であり、本稿では一貫して「最小一般了解度」を目標として論じる。

## III. 英語音声学とニホン英語の接点

### 1. アクセント

アクセントは一般に「強勢」と同義に使われる。Kenyon によると「英語とラテン語の共通の祖語である印欧祖語では、アクセントは本来自由 (free accent)」で、「OE (Old English) では強勢のない母音でも別々に明瞭に発音されて」おり、強さはほとんど日本語と同じく、ほとんど平坦アクセント (even accent) であったという。その後1250年ごろから多くのフランス語の語彙が流入、アクセントはフランスのそれとおりに自然と語尾に置かれるのが普通だったが、しだいに英語のように強さアクセントとなって第一音節あるいはその近隣に移動、たとえば tellen, giefan, catte はそれぞれ tell, give, cat のようになり、現在では強勢を必ず明瞭に発音するようになった。

アクセントには狩猟民族・農耕民族といった民族レベル上の、あるいは性格といった個人レベルでの相違が反映されるのが自然である。ところが英語音声学の成果としてのこの厳密さにこだわる日本人教師の中には、kimóno から始まって Yamáda, Masáo, Nagóya, Okináwa など姓名や日本の古来の地名にまでいちいち強弱アクセントをつけて学習者に指導、テストするものが現れる。そして自らもそれをもとに英語を使い始めた途端、まるで性格が変わったように、高低でもなく異様とも思える強弱をつけてしゃべりだし、私たちを驚かし、場を白けさせるのはその不自然さを如実に表わしている。

Gimson によるとアクセントは、普通の連続音声では単語の80%以上を単音節語が占めており、2音節語が15%、3音節語が3%となっているという。語強勢ではたとえば *op-por-tu-ni-ty* は 2-4-1-5-3 のように *tu* が1番強くなっている。このように、英語の単語には少なくとも一個の強勢があり、それがほかの音群を弱めている。

しかし本稿で取り上げたいのは、強勢よりむしろアクセントのない弱形の部分である。日本人にとっては NSE の語尾の閉鎖音が特に聞こえないために、日常のコミュニケーションに大いに不便をきたしている。たとえば日本人には *map*, *mat*, *mac*, *mad* をはじめ、*bad* と *bat*、それに命にも関わりかねない *start* と *stop* や語頭の *freeze* と *please* の区別さえつかないことがある。ではこのような日本人の苦手な NSE の語尾を閉鎖音で止める発音では、NSE たち同士ではどのように区別しているのだろうか。

NSE の語尾の閉鎖音は、実際は少なくともそれぞれの調音点のところで発生直前に止めているので、その直前の母音と閉鎖寸前のところで止まる時のかすかな残音で聞き分けるのだが、藤井によるとたとえば *bad* と *bat* の場合、NSE たちは [t, d] 音に先行する母音の長さが違うことで区別するという。たとえば軟音 [d] の前の母音の長さは硬音 [t] の母音の2倍の長さがあることを感知し、語尾が [t] では急ブレーキで止まるが、[d] では緩やかに止まることを知っているのである。

NNSE の日本人にとっては、こんな風に聞き分けろというのは神業のようなものであって、筆者自身往々にして不可能である。ではどうすればいいか。OJ では素朴に、まさに文字通り語尾を閉鎖するのではなくはっきりと破裂させる。これについて「そもそも開放してもしなくてもよいものではあるが」と藤井が指摘するように、要は破裂音も閉鎖音も両音とも丁寧に発音すれば問題は解消するだけのことである。

さて弱形のアクセントについて Kenyon は「次第にあいまいな音になり、アクセントがあるときは共鳴、音色の点でまったく異なってしまい、*i* や *ə* になるがそれは教養人にも現れる。さらにアクセントがありながら *ə* のようなあいまい音を使う人もいるが、それは卑俗とは限らない。なぜなら英語の音声法則に通じていない悪気のない教師の検討違いの結果なのである。アクセントのない *i*, *ə* 音は英米の教養人の間であまねく使われるので



ある。これは英語の属するゲルマン語の重要な音声法則なのである」という。

しかし私見だが、NSE の英語はどうも母音より子音にアクセントを置いてしゃべる傾向があるように聞こえてならない。日本人に対して difficult を [dɪfɪkt] と子音のみで発音することを一世紀以上にわたって指摘してきた Daniel Jones をはじめとする NSE のアクセントは、日本人のような di の [i] に強勢が置かれるというよりむしろ [d] の有声子音だけが聞こえるだけで、他は無声子音のため聞こえない。さらに今では本来肝心の強勢を置くべき母音のほとんどは、極端な短音のシュワー音 [ə] になって語全体を聞こえにくくしてしまっている。彼らの発話はその連続体だから、[dɪfɪkt] のように破裂・摩擦・破裂・閉鎖といった子音の飛び交う乾燥した音声に聞こえる。筆者が英米英語を「子音英語」、それに対してニホン英語を「母音英語」と呼ぶのはそのためである。

現代英語がこのようにして強弱の非常に激しい粗野な言語になってしまったと考えるのは、筆者のみであろうか。[ə] 音については後に詳述するが、たとえば極端な例ではあるが、from は [fm]、Japan は単に [pæ]、breakfast は [bre] のみ、gentleman は [dʒen]、different や difficult は共に [df]、because [kɔ:] と、他の音はほとんど無視されているのである。そしてついには What is going on? は [skounen]、Did you eat yet? は [dʒi:tjet] しか聞こえない(末延1986,2002)。

つぎに強弱、高低アクセントについて述べる。確かに日本語は基本的には高さアクセントだが、英語は強さアクセントである。藤井によれば、声の高さと強さでは「高いところでは強く、強いところは高いというのが普通である」という。つまり日本語でも英語でもアクセントの卓立は通常強さと高さが重なり合っていると同時に、それは意味内容の軽重とも一致する。一般に動詞や名詞などの内容語は重く、前置詞や代名詞のような機能語は軽い。

このように英語を日本語の高さアクセントで発声するという OJ 発音の発想は、英米の音声学者たちには全くないようだが、歴史的に見ると中期英語の初期までは高さアクセントであった。そして OJ ではその高さアクセントが現実となっていて、それを使うことで何不自由はない。Jenkins も Nuclear tonic stress の重要さを指摘しているように、OJ は強弱ではなく平坦アクセント、あるいは高低アクセントを堂々と使えばいい。これが「ニホン英語の発音を支配する根本原理」の一つでなくて何であろう。ちなみに筆者は日本語でも英語でも通常は強弱アクセント、家内は高低アクセントで話す。

こうした中で Gimson は「学習の最優先事項その一つはアクセントである」という。藤井は強形と弱形の練習の仕方について「まず個々の音声の強形を学んで後に弱形を」という。つまり活字から筆記体へということだろう。小栗は「強勢を誤ったら全く分からない」という。確かに最初はわからないだろう。しかし1時間もすればお互いの英語の発音体系

を判り合う。これがことばの柔軟さであり偉大さでもある。現実には雨と飴、雲と蜘蛛が逆になる東京弁と大阪弁のアクセントの違いは、数分もすれば互いが理解できるようになるのと同じく、そんなに大きな問題ではない。さらに藤井は「NSEのアクセントを唯一正しいと絶対視してはならない」、なかでも「特に形容詞や副詞のアクセントの定位置はほとんどないと言ってよい」という。

さらに Kenyon は「英語の本来持っているこの特色(下線筆者)からの作為的な逸脱こそが社会の中心をなしている教養ある人々が実際に用いている発音における乱れなのである」という。“この特色”とは強勢のある音節とない音節の相互関係であるが、この乱れや逸脱さえを NNSE も真似なければいけないのであろうか。もしそうであれば、これこそ NSE の独断と偏見からくる傲慢さである。

小野(2012)の観察によると There 構文の there も文中の副詞の there も同じようなアクセントで発音したために、NSE の教師からバツをもらった学生がいたという。狭い NSE 同士の世界だけでの考え方ならそれでいいだろうが、NNSE や OJ の発音に対してもこの観点に立って NSE の真似を強いるのが日本の英語教育である。Jenkins は、自然さを保つには不可欠だといわれる弱形は intelligibility には役立たないし、word-stress は柔軟性を削ぐという。コミュニケーションはシーソーのようなものである。耳ざわりといわず、このように両成敗でともに認め合うのがいい。

## 2. 音節

冒頭にも記したように、今から400年も前には、英語の1音節語“king”は「キング」のようにニホン英語式に3音節で発音していたと藤井は書いている。ところが現代英語の発音は日本語の発音とくらべて、strike, strength のように母音よりも子音が格段に多く用いられ、音節も子音、それも閉音節で終わる。これはゲルマン語族、ドイツ語等についてもいえることだが、その中でも英語は“閉音節語”といわれるくらいに閉音の出現率が高い。そして閉鎖音で締めくくられる閉音節は藤井によると、英語の全音節中の何と86.9%だという。

このようにして音声として最も明瞭な母音がシュワー音となってついには消失したかわりに、逆に音連続と閉音節が増加して明瞭度を下げてきたこの英語という言語の音声は、平凡な日本人である筆者の耳には、失礼ではあろうがまるで“荒っぽく履きつくされ、擦り切れて穴が開いて脱ぎ捨てられたゴム靴”のように聞こえてならない。それはなぜか。英語を世界の中の言語の一つとしてその特徴を見てみよう。

松本克己(2007)によると、言語の語頭の子音群について「現在地球上で5～6千を数える世界言語の圧倒的多数は、語頭の子音群を許容しない。それを許容する言語は、おそら

く全体の10%にも満たないであろう」といい、日本語の語頭には単一子音だけで2つ以上の子音群は生じないという。さらに「*strike, extraordinary* のように語頭の子音群はアクセントの影響などによる母音の消失で発生するが多い」という。続いて松本は中国語もサンスクリット語、ギリシャ語、ラテン語も古い時代には語頭の子音連続があったが、皆、時代とともに解消されたという。そんな中で繰り返すが、英語の全音節中の閉音節の割合は86.9%にも上る。

一方日本語は開音節語で、これはフランス語、イタリア語のようなロマンス語、それに中国語、ハワイ語についても言えることであるが、当然ながらこれらの言語は子音より母音、無声音より有声音の方が明瞭で丁寧という点で聞こえ度がよく、通常母音が音節の中心になる。

このように日本語の音節は明瞭で規則的なため、その数は106種～約300種程度であるのに対して、英語は音節構成が不規則で3,000以上あるといわれる。たとえば *strengths* [strenθθs] は1音節であるのに対してニホン英語ではストレングスで6音節、つまり大ざっぱに言えば明瞭度は数倍となる。

また Gimson によると普通の連続音声では、英語の単語の80%以上を単音節語が占めており、そのうち子音の割合が60%であるという。ちなみにイエスペルセンが提示した聞こえ度 (sonority) は、高い方から順に母音 a, æ→半閉母音 e, o→閉母音 i, u→半母音 j, w→そり舌半母音 r→側音 l, m, n→有声摩擦音・有声閉鎖音→無声摩擦音・無声閉鎖音・摩擦声門音となっている。

要するに誰にもわかることだが“口を大きく開けてはっきりと発音した方が聞こえ度はいい”ということになり、これは概して丁寧すぎると揶揄されるニホン英語発音の特徴と最も顕著に一致する。つまり日本語と比べて英語自体が子音の使用量が多いため、英語の明瞭度は日本語より劣る。そこで日本人がこうした英語言語に母音を添加、例えば *book* の語尾に [u] を添加する態度はごく自然な音声現象であり、決して恥ずかしいことではなく、むしろそれは聞き手のために明瞭度を増すためのれっきとした「音声の明瞭化の法則」に自然と沿ったものである。

### 3. リズム

前述のように、日本語は個々の音節の連続リズムであり、一方英語は強弱のアクセント、つまりその連続体としての強弱リズムで話すのが普通である。日本語の音節は、a i u…の母音一個でも、また *ka, su, te* のような子音が付属した母音でも、時間的にはほぼ同じ長さ (0.23～0.28秒) で発音されることから、藤井によると日本語の音節は同一テンポの発話内ではほぼ同じ時間的長さで発音されるという。これは音節リズム (syllable-timed rhythm)

と呼ばれ、機関銃、ポンポン蒸気の短い連続音に似ており、これは同時に OJ の発音の一大特徴でもある。

これに対して英語は強勢リズム (stress-timed rhythm) で、大砲の連続音といえる。そして英語の強弱も日本語の高低のリズムの度合いも、ともに文意の軽重に通じる。そしてたとえば次のような2つの文は、NSE にとっては、自然に発音しても等時間内におさまるといふ。

We speak English.  
We can speak our English.

日本人のリズムで英語を歌っているのが OJ だといっていいだろう。リズムは各民族にとって固有の、根源的なものであるからこそ、個性として守る必要がある。そこに卑屈になったり恥ずかしむことがあろうか。日本人は日本人、英米人は英米人のリズムで歌うといった方がいい。ことばをやたら芸術至上主義として持ち上げるような音声学者にあわせるような無理をしない方がいい。

しかし一般に日本人は英語の強音節の発音に似せるために十分な練習をする必要がある、といわれる。たとえば Jones, D. は英語のリズム学習に関して名指しで「すべての外国人のうち最大の困難は日本人によって経験されている」とまで断言する。“英語の強弱リズムを日本語の高低リズムで発声する”という発想と譲歩は、大英帝国の植民地政策のために現地人に対して非情なほどに厳格な発音教育に全生涯を注いだ Jones には全くなかったのは当然である。でもアジア英語、なかでも OJ ではそれは現実となって使われており、Jenkins もこの発想を支持している。

しかし英米英語のリズムの大切さについては、Jones のみならず多くの NSE や NNSE も、特に英米人が体質的に持つリズム単位の枠組みを NNSE に習得させることの重要性を説いてきた。C. C. Fries (1954) は「われわれは普通、伝統的に抱いている考えに反して、早い会話の了解のためには、個々の音の正確な音声学的な性質よりも、これにかぶせる穏当型の方が大切であるということは、経験により示されている」というが、これは NSE 同士だけのことなら納得できる。さらに「たとえ個々の音単位は不正確でも、高さの連続の正しい方が、個々の音はほぼ正確であっても、高調の曲線が誤っている場合よりも、外国人(の英語)は了解されやすいだろう」という。しかしそれは実証されているとは思えないし、NNSE からすればむしろ逆であった(末延2003)。

OJ では無理に NSE のリズムの体質に合わせる必要はない。お互いの体質を認め合うところにこそ互いのことばに真髓があり、英語の強弱、日本語の高低のリズムの度合いは、ともに文意の軽重に通じる。日本語の体質で英語を丁寧に話すことによって、お互いがその特徴を理解し合い、歩み寄ればたがいに通じることができる。

しかし Pike, K. は日本人にとって英語の習得は、「英語の各音節を等時間的に発音する習慣を破壊することによってのみ可能である」といい<sup>(注2)</sup>、We speak English. のリズムでも We can speak our English. の場合でも、自然に発音しても等時間内におさまるように発音しなければならないということになるだろうが、NSE にとってはこれらは当然自然にできるのであり、日本人には当然日本語のリズムが自然にできるのである。Jenkins は stress-timed rhythm について、重要でないし存在しないという。スピードの速い英語の強弱リズムは経済的だろうが、度が過ぎると荒廃したことばに陥ることになる。

#### 4. イントネーション

イントネーションとは、声の調子が上下の変化となって表れたもの、つまり声の抑揚といえよう。声の高さと強さの関係は、藤井によれば「高いところでは強く、強いところは高いのが普通である」という。言語や文化は違っても、人間の感情は誰もほぼ共通で、呼びかけ、依頼は上がり調子を、命令・平叙文は下がり調子となる。しかしわずかながら地域差、年齢差、個人差があり、たとえばイギリス英語は音調の起伏が激しく不快な場合もあり、アメリカ英語は平坦、不愛想に聞こえがちといわれる。

どのような言語の音声も程度の差こそあれ必ず何らかの強弱、高低を持っており、それらを持たない言語音はない。英米英語もOJもしかりで度合いが違うだけのことで、だからたいいてい日本語、英語のイントネーションは強弱と高低が入れ替わっただけのことで、実際はほぼ重なっていると言えるから、互いがそれを理解すれば問題はない。Jenkins は、pitch movement は教えきれないし、ネイティブ信仰に結びつくか、文法依存のピッチとなるという。つまり一般のコミュニケーションでは“分類”のしようがないということであろう。

### IV. 個々の音声

#### 1. 母音

##### (1) 概観

Gimson によると、母音は「だらしなく、でたらめに発音する時代もあった」という。その理由とは「英語の母音は子音よりも著しい変化を受けてきた。少々調音点、舌の高さが変わってもわからないからである。つまり調音点の位置がたえず不安定であり続けてきた」からである。

事実、15世紀から17世紀にかけて、文字は変わらないまま「大母音変化 (Great Vowel Shift)」と呼ばれる時期があり、母音は変化した。長母音の調音点が一段階上に推移、

音声はより高く明瞭になった。たとえば ME (Middle English) 時代の name [ɑ:] は PE (Present English) になると [ei]、さらに OE (Old English) 時代の Mice は [i:]→[u:]→[y:]→[i:] へ、そして ME では [e:] と発音されていた meet は1500年ごろまでに [i:] となり、いずれも調音位置が高く明瞭になった。言語音のうちで母音が最も聞こえが大きく、次いで子音であるが、人は明るくなったり興奮したりすると母音も張り切って高くなり、それに沿って喉仏も高くなることが知られている。

英語では単母音が13～15、二重母音は9、子音が24で、計46～48の音がある。それに対して日本語の母音はアイウエオの5つしかない。だが角田 (2009) によると、世界の130言語を調べた結果、世界の言語の中で母音の数が5つである言語が一番多いという。だから日本語は世界で最も普通の母音をもった言語であるという。これは英語の母音が13個といわれる中で、日本語の母音の数が単に5つであるという事実にたいしても当てはまるだろう。母音と子音の割合は、日本語では1対1であるのに対して、英語では約1対2である。英語母音の出現頻度順位は、Fry, D. B (1974) によると、e, ai, ʌ, ei, i:, əu, æ, p, ɔ:, u:, u, ɑ:, au, ɜ:, eə, iə, ɔi, uə の順である。

## (2) 個々の母音

自動車のハンドルにはある程度の「遊び」があるように、藤井はその著(1986)で「いかなる言語でも音声には必ずある程度のゆれ幅がある」といい、日本語の母音と共通性の高い英語と、互いの共通性の低い母音を部類し、順を追って紹介している。本稿でもほぼその順序に沿って、厳密には日本語の母音の揺れ幅と共通性の高い英語の母音の揺れ幅と、さらに互いの揺れ幅の共通性の低い母音との2つに分類し、個々の発音を見て行くこととするが、前述のとおり主体は日本人の母語である日本語であるから、日本語の母音発音を主軸にして、そこから当該外国語としての英語発音を当てはめて行く方法をとる。

日本語の [アー] 音は自由母音 (free vowel) と呼ばれ、自由で緊張のない母音である。これは英語の [ɑ:] 音に近い発音であるが、英語ではより口を広げる。藤井の観察によれば、certain, search, learn, deserve, mercy など 'e' や 'ea' 系の [ə:] では [ɑ:]、つまり [アー] に近い音で発音することもあるという。しかし次のような発音問題が、日本では初学者を相手にいまだにまかり通っている。

問：Heart の下線の発音と同じものの番号に○をつけなさい。

(1. car 2. war 3. writer)

どれもカタカナでは [アー] となるのだが、日本語を母語とする日本の中学生に、シュワー音との厳密な区別を試している。カタカナで表現できない発音記号の相違までを問う出題

はすべきではない。

日本語の [イー] 音も同じく自由母音で、英語の [i:] 音に近い発音であるが、英語では舌をさらに左右に引く。アメリカ英語では母音の長さは音素 (phonemic) ではないが、日本語では母音の長短は意味の変化をもたらす。Jenkins の観察によると、韓国、タイ、香港、マレーシア、シンガポールでは長短母音は区別がなく、日本人や韓国人には聞きとりにくいとされる。[i:]→[i] seat-sit, short-shot, calm-come, pool-pull といった母音の長さ、つまり長母音と短母音の区別をしっかりとさせることだという。確かに音素の点で問題もあり「英語らしく」とは言えないだろうが、[i] 音と [i:] 音のような、各五組の母音のそれぞれの「音の質の違い」を「音の長さの違い」にすり替えるとどうだろう。

日本語の [ウー] 音は英語の [u:] 音に近い発音であるが、英語では唇を丸める。フォルマントが一番低い。つまり明瞭度が一番低い。

日本語の [エー] 音は英語の [e:] 音に近い発音である。フォルマントが [i] 音に次いで高く、日本語の [エ] 音とほぼ同じ調音点に位置する。RP 母音の出現頻度の中ではこの発音は非常に高い。

日本語の [オー] 音は英語の [ɔ:] 音に近い発音であるが、英語では口を広げ唇を丸める。フォルマントが [u] 音に次いで低く、明瞭度も低い。

日本語の [アッ] 音は抑止母音 (checked vowel) といって声が止まる性質をいうのだが、英語の [ʌ] 音に近い発音である。しかし英語ではあまり口を開かない。but, cut は [ʌ] 音に、また brother, mother も [ʌ] 音となった。これは強勢の強まりによる影響で、このように強さはいよいよ強く、弱さはいよいよ弱くなった。藤井は nurse, thirty, worth, turn, church, burst, person などの [ə:] 音を [ʌ] の発音、日本語の [アッ] と発音する英米方言話者が多いことを観察している。

日本語の [イツ] 音も抑止母音で、英語の [i] 音に近い発音である。フォルマントは母音の中で一番高い、つまり明瞭度が一番高いといえよう。また英語の [i] 音は [e] 音に近く、着物は [ケモノ]、沖縄は [オケナワ] と聞こえるのはそのためである。

日本語の [ウツ] 音は英語の [u] 音に近い発音であるが、英語では口をつぐんで発音する。

日本語の [エツ] 音は英語の [e] 音に近い発音であり、通用度は定着している。

日本語の [オツ] 音は英語の [ɔ] 音に近い発音であるが、英語では唇を極端に丸める。

次に日本語の母音と共通点が少ない、自由母音にも抑止母音にも分類されない英語の母音を紹介する。

英語の [æ] 音は日本語にない音といわれるが「ア」音と「エ」音の中間音だから、日本語の [ア] 音の口で [エ] といえばよいと言われてきた。しかし藤井は「日本人が苦手とする母音 [æ] [ə:] については、have, has, had, hat, that, catch, as, sat, gather などの [æ] を [E] (エツ) と発音する非標準語話者は英米とも相当広い範囲に分布している」という。

Gimson によると、「日本語にない英語の基本的母音は æ, e, ə の三つだけ」といい [æ] 音は a の文字で綴られる音のうち、アクセントのある場合の最も多く現れる音という。OJ でも cat を [kjæt] のように拗音 [j] を挟んで発音することが多い。しかし通用度には支障ない。逆にシンガポール英語、香港英語、マレーシア英語ではアクセントを付けずに [æ] 音を [e] 音に、つまり Dad を dead に、salary を celery と発音することがある。

英語の [ə:] 音は [ウ] の口で [アー] と発音する。藤井は方言として [ʌ] [アッ] と発音する英米人も多いという。また earth, earnest, earn など 'ear' では [ɛə] [エア] と発音されても通用するという。

英語の [ə] 音はすべての母音が弱められた時に出る母音で、大胆な表現が許されるならば、“舌の安楽椅子” と言っていいだろう。この発音はシュワー音と呼ばれ、すべての母音の、そして本稿全体にかかわる問題をかかえている。子音の閉鎖音とともにコミュニケーションの理解に大きく影響する発音であるので、ここでは詳しく論じることとする。

歴史的に見ると「OEでは強勢のない母音でも別々に明瞭に発音されていた」とKenyon が指摘するように、ここでいう「強勢のない母音」とはシュワー音であり、OE ではそれぞれ固有の母音発音が個別に明瞭度を以て発音されていたことは明らかである。この [ə] 音は [æ] 音とともに日本語にない英語の基本的母音の一つといわれ、小栗はたとえば holiday はホラデイ、today はタダイと発音するというように「どんな場合でも決して強く発音してはいけない」という。しかし英語に限らず日本語を含め多くの言語の実際の会話では、たえず現れる音声であって、舌の安楽椅子たるゆえんである。だから意識しなければ何でもない発音だが、とりたてて“意識するな”といわれ、それが採点される対象とな



ると逆に極度に緊張し、多くの日本人学習者にとって逆に一番難しい発音の一つとなっている。

そして Kenyon はいう。「アクセントのある母音もアクセントがなくなると [i] や [a] 音になるが、それは教養人にも現れる。さらにアクセントがありながら [a] 音のようなあいまい音を使う人もいるが、それは卑俗とは限らない。なぜなら英語の音声法則に通じていない悪気のない教師の検討違いの結果なのである。」さらに「アクセントのない [i, a] 音は英米の教養人の間であまねく使われるのである。これは英語の属するゲルマン語の重要な音声法則なのである。」つまり、「学校教師たちはすべての母音をはっきり発音することだと教えてしまう」という。その結果、「日常の話し言葉で強勢のない母音を完全母音として発音すると、多くの語は通じなくなってしまうであろう」という。シュワー音になるのが音声法則なら、OJ のように自然とシュワー音にならないで明瞭に発音されるのも同じく音声法則である。コミュニケーションは丁寧であることに越したことはないはずで、通じなくなるどころかかえって通じやすいことを筆者はすでに実証(末延1995)している。

さらに、Kenyon をはじめ多くの音声学者たちは「強勢のある音節とない音節の相互関係を乱すのでは、決してより明瞭な発音やより美しい発音は望めない」という。あらゆるものが高速化時代の波に乗るために、ことばの発音、中でもこのシュワー音はこのように簡便化のためにさらに乱れて行く。Kenyon は、「現代英語は静かにゆっくりながら綴りは変わらずにシュワー音になってゆき、シュワー音はますます用いられるようになってるのは明らか」であり、今や「どの母音の文字にもあらわすことができる」という。

その結果、「最良の発音とは聞き手によって意識されることのないような発音なのである」とKenyon は指摘する。これは先述のように一見、人道的で平等な采配に見えるが、NSE の一方的な粗野な観点である。このような状況は同郷の者同士の会話ではごく自然に起こるが、そこにいったん他郷の者が加われば互いに大いに意識される発音で、英語が国際英語になりつつある今では、ネイティブ同士だけの発話から見た素人的発想である。このような、世界中“誰にとっても意識されることのないような発音”というのは、NNSE の観点からすれば無味、無色透明の発音ということになり実際にはありえないし、国際社会では通用しないどころか極めて非人道的な見解である。

それより第一、発音の微妙な違いが相手に分かってしまっただけとはいけないことなのか。国際英語としての英語ではこれこそ発話者の個性なのである。しかし、まさにこの個性を奪うこの見解は同時に文部科学省の目指す日本人の英語学習の最終目標と言ってもいいもので、英米以外の15億人の英語使用者を除外した、単に英米社会でのコミュニケーションを想定したものに他ならない。それは『中学校外国語学習指導要領解説』にあるように、「標準的な発音」「特定の地域やグループの人々の発音に偏ったり…(過ぎないこと)」「正しく

発音すること」に続いて「音変化に慣れておくこと」といった表現で満ちている(文部科学省2009)。

一方Kenyonは「北イングランドやスコットランドでは標準的にあらゆる with をはっきりと [wiθ] と発音する。彼らにとってはこれが標準英語なのである」と矛盾した断言をしているが、それなら OJ も国際英語もそれぞれのグループにとって標準英語であってしかるべきである。

## 二重母音

二重母音は後の音を弱く短く発音するようといわれるが、牧野(1965)は英語の二重母音の発音は「日本語の母音を重ねる発音が案外向いていると考えられる」という。それに Jenkins は長母音と短母音の長さの違いを重視していることは注目に値する。

アジア英語では Jenkins の観察によるとマレーシア、シンガポール、香港では二重母音を短母音として pain を pen, つまり [ei] を [e] のように発音する傾向がある。さらに香港英語ではたとえば lake が [lik] に, take が [tik], pain が [pin], つまり [ei] が [i] になる。マレーシア英語では mail がメル、steak がステクというように [ei] が [e] 音に発音される。そして OJ や韓国英語では joke がジョーク、loan をローン、bone をボーンのように [ou] が [ɔ:] 音になり、slow はスロー、lake がレーク、mail がメールというように発音しがちだという。

しかしそれぞれのこうした英語の発音形式が規則的なためにシステム化しており、ほんの少しの会話の後には、互いにその音声構造が理解できるようになる。OJ では taught, thought の [ɔ:] を文字通り [オウ] と発音する傾向があるが、通用にはほとんど支障はない。Kenyon によると caught の au と bought の ou は古くはそれぞれ [au] [ou] と発音されていたという。歴史をたどれば、目くじらを立ててその違いを初学者にテストして苦しめるほどの重要さはなさそうである。

### (3) 母音の教育的示唆

藤井が指摘したように、英語の主要な母音のほとんどは日本語の5つの母音で代替することができることが分かった。高本(1965)の観察では「アメリカ英語の発音、特に母音の /ieaou/ を発音する時の舌の高さは日本語の場合より低」く、さらにアメリカ発音では緩んでいるのに対して、日本語では引き締まっているという。日本の母音体系ががこれほどに明瞭であることを示している。

また Jacobson (1976) によると、世界のあらゆる言語の学習順序はすべて [ア, イ, ウ, エ] の順序で行われるといい、幼児は開口度の一番大きい「ア」の次に一番小さい「イ」、次

に「イ」と対立する奥の「ウ」というふうに習得、そしてこれら [ア, イ, ウ] の3音はすべての言語に存在するという。だからプロのアナウンサーを目指すならともかく、英語を学ぶためにわざわざ小栗の指摘するような「ɑ:, ə, ʌ, ɔ:の順でだんだん口を開ける練習」をするほどの必要はないだろう。

そんな中で Gimson は「(母音：舌の高さなど)少しでも行き過ぎると、俗な感じや方言的な感じに聞こえる」と厳しく指摘しながらも一方、母音は前述のように「だらしなく、でたらめに発音する時代もあった」と振り返る。そして NSE にとってそのような社会であるためかはさておき、現代がそのでたらめな発音の最たる時代であろう。そのでたらめさをそのまま生真面目に受け止めて真似させる、というのが日本の英語教育の現状である。一方、同じロンドン大学の流れを汲む Jenkins は、母音の質については一貫性があれば地域的な特性は容認されるべきだという。

以上のように、歴史の変化の中で不安定に揺れてきたプリンのような微妙で不安定な舌の動き、じゃじゃ馬に乗っているカウボーイのような不安定な身体の動きをもつ13以上にもわかる英米の母音音素の習得のために、無駄に時間を費やされてきた日本の英語の音声教育が、現在もお延々と続いている。それに対してニホン英語には、ほぼ安定した5つの日本語母音があって、それらが英語の13の音素をまとめて通用する役割を果たしていることを、OJ を通じて世界に知らしめることが必要である。

## 2. 子音

### (1) 概観

前述のように、英語の母音は調音点の位置がたえず不安定であり続けてきたため、著しく変化してきた。ところが子音は少しでも調音点、舌の動きが変われば誰にでも気付き、誰もが注意して矯正するので、これまであまり変化はなかった。だから世代がかわっても安定してきた。

英語で発話される連続した音の中で、母音の割合が約40%に対して子音が60%である。しかしOEの [f, θ, s] 音の異音であった [v, ð, z] 音のように、対立的となり音素的意味を持つようになった子音もあれば、逆に [x], [ç] 音のように消失した音もある。だからこうして音素の数の調整がたびたび行われたにもかかわらず、Gimson は子音は過去1000年かなりの安定を保っているという。子音のなかでも、舌尖と上の歯茎とで作られる閉鎖音 [t, d]、摩擦音 [s, z] などのような歯茎音は、最も多くの子音を含むといわれる。ちなみに D. B. Fry によると、RP 子音の出現頻度は、順に [n, t, d, s, l, ð, r, m, k, w, z, v, b, f, p, h, ŋ, g, ʃ, j, dʒ...] 音である。

聞こえ度については言語音のうちで母音が最も大きく、子音はそれに次ぐ。まず鳴音の

[m, n, ŋ, l] 音、つぎに有声子音、無声摩擦音、無声閉鎖音、そしてもっとも小さいのが [p, k, t] 音である。このように子音は破裂・閉鎖したり摩擦したりして出される音であるから、母音ほど聞こえ度や明瞭度は大きくないのは当然である。それにもかかわらず、前述のように Daniel Jones は「すべての母音を省略して [dfklt] と練習すべし」と指摘したが、これでは NSE 的な発音になって“英語らしく”なったとしても、国際英語では非常に不親切な発音となることは明らかである。その点で OJ の [difikaluto] という発音は国際英語として丁寧な、あるいは丁寧すぎる発音とみなされるだろうが、日本の英語教育はいまだに Jones の指摘をそのまま受け入れている。

また、聞こえ度が低いという点から小栗は「子音の差で意味が通じないことはあまりない」というように、たとえばアメリカ音の [t] は軽く発音され、水を日本語で [ミル] という人もいるのと同じように water は warer, twenty を tweny になど。またたとえば摩擦音のグループ内では、ロンドン英語やサッカー選手のベッカムが I think~ の [θ] 音を fink の [f] 音とするように、摩擦音同士互換しても通じる。そして有難いことに、互換できるほとんどの英語子音が日本語にも存在している。

だから同じグループの発音は互いに融通が利くからわざわざ個別に厳密に訓練しなくともいいのであると考えるのも一理あるが、これは NSE の間での話であり、彼らは音声を客観的に聞いているというより、むしろ主観的に話者の文意、真意を聞いているから融通が利いた聞き取りができていたのである。ただ言えることは NNSE が NSE にこのような互換された発音をした場合、理論的には理解されやすいということと言えるだろう。しかしただ、再三述べてきた語尾の閉鎖音については大いに問題がある。

## (2) 個々の子音

日本語の子音に少なからず共通するであろうと思える英語の基本的子音の一部を紹介する。大胆すぎて異論、浅学のため勘違いも大いにあるが、ここに個々の発音を解説する。

### A. 破裂音(閉鎖音)

本項の名称を「閉鎖音」とせず、あえて「破裂音」としたのは理由があるがそれは後述する。この子音群には開放音すなわち破裂音と無開放音とがあるが、近年、無開放音すなわち閉鎖音の方に重点がゆき、現在では一般に閉鎖音といえば破裂音を含む音というように、破裂音が消極的に説明されている。なかでも無開放音(閉鎖音)は NNSE にとって母音の [ə] (シュワー音)とともに聴解理解に大きな影響を及ぼす発音であり、英語では、開音節よりも閉音節で終わる単語の数の割合の方が9割にもなるといわれているほどに閉音節止まりの単語や文が多く、get dark, good morning, big news, dark night などは子音を開放しな

いので聞こえない。まさにコミュニケーションの“閉鎖”をも生む音である。しかしこの閉鎖音こそが日本の文部科学省の“英語らしさ”という強力な指導項目の目玉商品の一つである。

[日本語パ・バ行の頭音] は英語の [p] [b] 音と類似しているの、そのまま使える。言語にもよるが、人間は本来有声・無声音、唇と軟口蓋の制御を生理的にできるようになると、だれでも /p/ と /b/、/t/ と /d/、/k/ と /g/ を発音でき、対立的に使えるようになる。だからわざわざ練習の必要はない。

しかし英語では口中に空気をためておいて勢いよく出すのだが、日本語では元来 [p]-[b] 音の区別が弱いので、NES は日本人のこれらの OJ 発音を聞き違いやすい。なかでも pin, tear は NSE の耳には bin, deer に聞こえやすいという。特に [p] 音をしっかりと発音してほしいという Gimson の要望にたいしては、これは日本人にとって特に難しいことではない。

[タ・ダ行(チ・ツ、ヂ・ヅを除く)の頭音] は英語の [t] [d] 音と類似しているが、アメリカ音の [t] は弱音節では軽く、Betty は berry に、twenty は tweny と発音されやすい。米人の発音ではよく water, butter, city がワラ、バラ、スイリに聞こえるが、藤井は練習する必要はないが聞いて理解する必要があるという。弱音の t は破裂する圧力が低くなり、wanted, winter, center, twenty, bottom, settle, Get it? も、ウォニツ、ウイナー、セナー、トゥエニ、ボルム、セルル、ゲリッ? と発音される。また want to, going to がワナ、ゴナになり、live, lived  や talk, talked  の区別は NSE でさえも文脈によるしかないという不便さがある。また Wednesday の [d] 音は発音されないのと同様に London の [d] 音も発音されないのが普通だったが後者は復活した。これは NSE の [d] 音の不安定さを露呈している姿である。

[カ・ガ行の頭音] は英語の [k] [g] とほぼ同じである。Kenyon によると knee, knit, knot, knight, knife, knowledge の [k] 音は17世紀まで発音されていたというが、これも流動的で不安定である。また asked  は [k] 音が省略されて [æst] と発音されることがよくあるという。日本人の [k] 音は日本人の弱い [p] 音とは逆に非常に口蓋化された音で、きつすぎることが多いといわれる。

## B. 摩擦音

[サ・ザ行(シ・ジを除く)の頭音] は英語の [s] [z] 音にあたる。Kenyon によると It's a fine

day. の s にあるように、古くは as, was, is, his などは [z] 音ではなく [s] 音と発音されていたという。英語の [s] 音は子音の中でもっとも激しい呼気で、息を前歯の裏側に激しくぶつける。時には強すぎて stop や bus はシュトッブ、バシユのように [ʃ] 音に聞こえる時がある。[s] と [ʃ] 音の違いは日本人には誰でもできるが、[h] と [f] 音の違いは練習が必要というように、難易度を分けて考えることが大切であろう。日本人はタイガーズではなく、タイガースと発音することに文句は言わない。グリンピースもそうだ。英語教育の世界だと大きなバツをもらうことになる。

さらにこれら頭音は英語の [s] [z] 音だけでなく [θ] [ð] 音と類似しているが、Kenyon によるとローマ人をはじめ現在 [θ] 音と発音される英語の多くは、[θ] 音を [t] と発音していた。また th ではじまる than, that, the, their, them, then, there, they, this もかつては [θ] の発音をしており、弁別的な音ではなかったが、強勢の消失により有声化したという。また [s] 対 [z]、それに [f] 対 [v] 音も同じく弁別的でなかったから、どちらの音をつかってよかったという。

日本人の幼児もこの摩擦音 [θ] [ð] の位置からサ・ザ行音をはじめることがあるが、それは [s] 音よりも生理的に簡単だからである。藤井によると土佐では [toθa] と発音する人が多く、奈良のある村では、風、枝を [kaðe], [eða]、英米の幼児も pass を [paθ], this を [θiθ] と発音することがあるという。筆者の長男2歳(当時)は「お父さん」を「oto:θan」と発音していた時期があった。聞こえについては、fourth と force のように日本人にとっては前者の [θ] 音は末尾では聞こえにくいですが、[s] 音なら聞こえやすいので [s] と [θ] 音の区別が付きやすい。

また、藤井は [θ] 音は摩擦音であるから時間継続があるが、(NSEは)早口になると think→tink, that→dat, thank→tank, thing→ting, worthless→wortlessのように [t] 音になり、the, they, there, this, that, though のような語の初頭の [ð] を [d] で代用するという。

さらに months, ninths, depths などの [θs] が [ts] で代用されることはすでに標準発音に代わるものとして確立しているという。これらはすべて日本人には発音しやすいので自然と OJ 発音にもなっている。また、both, truth, mouth, death, breath など末尾の [θ] は、NSE の間でよく [f] で代用されるという。何ともうらやましい限りだと思う、そのことが日本の音声教育の異常さを物語っている。オーストラリアの大学でニホン英語を教えた時、日本語コースの学生が「日本人は“蜘蛛”を“クモ”とカタカナで書いてもOKなんて羨ましい」といったことを思い出した。

さて、職業上厳密な区別を必要とする NNSE には [s] と [θ]、[z] と [ð] 音の区別が要求されるだろう。小野(2012)によると、[s] 音の難しさについて、在日のネイティブ教師は sink, think の発音で、学生は [θ] 音はできても [s] 音ができないからとバツにしたという

報告がある。

[シ・ヂの頭音] は英語の [ʃ] [ʒ] に類似している。ところが日本語と同じであるから元来問題なく発音できるはずの she, ship, machine の発音を、学習者の中には何としてでも NSE に近づかねばならないという涙ぐましい努力の結果、英語らしいと褒められようとしてスィー、スィップ、マスィーンと得意気に発音する。これを hypercorrection と呼ぶが、一方 mission, ocean, special などはミッスィオンからミツシオン [s]→[ʃ] へ変化したため、日本人には発音しやすくなった。また日本語の拗音 [シヤ、シユ、シヨ、ヂヤ、ヂユ、ヂョの頭音] も英語の [ʃ] [ʒ] に類似しており、これらはフランス語から流入した発音である。issue は [isiu] から [isju] へ、そして [ifu] となった。

[ハ・バ行の頭音] に類似している英語の子音には、[h] [b] 音とともに [f] [v] 音がある。日本語の [フ] 音の頭音は口をとがらして両唇を摩擦するが、英語の [f] 音は両唇を横に引く。ロンドン英語では nothing を nafing, think を fink, three を frei [θ]→[f] と発音しても通じ、これは OJ にも現れる。

[ハ行の頭音] は英語の [h] と類似する。しかし関東弁・東京弁では渋谷をヒブヤ、一つをシトツと発音する傾向があり、he と she の区別がつきにくいそうだ。アメリカ人は日本語の兄 [ani]、姉 [ane] の区別がつかないのに、日本人は he と she の区別がつかないと笑う。

### C. 破擦音

[ツ・ヅの頭音] は英語の [ts] [dz]、[チ、ヂの頭音] は英語の [tʃ] [dʒ] と類似している。日本人は cars と cards の語尾発音の違いに悩まされる。ハイパーコレクションでNSEらしくと思うばかりに kitchen をキティンなどと発音してかえって通じなくしてしまう人がいる。

### D. 鼻音

藤井は日本語の [ン] 音には、厳密に言えば英語では“販売” [hambai] の [m]、“反対” [hantai] の [n]、それに“電気” [denki] の [ŋ] に分かれるが、英語鼻音の発音は日本人には困難ではないという。

[マ行の頭音] は英語の [m] 音に類似。英語発音ではン+マ行頭音であり、どの子音にもい

えることだが、閉鎖の持続がもったいぶって長い。

[ナ行の頭音] は英語の [n] 音に類似。これはン+ナ行頭音である。

[n] は前述のように、英語も “king” は「キング」のようにニホン英語式に3音節で発音されたのだから、[n] 音も当然少なくとも一音節と数えられていただろう。一方、Kenyon は「coming, going の語尾の [ŋ] 音はかつてはほとんど発音しなかった。無教養と即断してはいけない」という。このように現状でも現代英語の [ŋ] 音の発音は混乱しているといわれる。

日本人はこれら三つの鼻音を生まれた時から同一として聞いているが、英語国民は sin と sing, thin と thing, sun と sung のように対立させるので、職業上厳密な区別を必要とする NNSE は特に NSE とのコミュニケーションの場合、その違いを明確にして発音するのがよいだろう。

## E. 流音

日本語の [ラ行の頭音] は、藤井によると軽い破裂音で、英語の [l] に似ているという。Kenyon によると half は [hau<sup>h</sup>lf] と発音していたといい、walk, salmon の [l] 音は近代期に入って消失した。これは現代英語の不動の特徴だという。日本人には末尾の [l] は易しいが、語頭の [l] は強い音で難しく、[ウロー]と発音すればよいという。

弱い [l] 音は all だとオールではなく [オーウ] が英語らしく聞こえるようだ。しかし日本には最近こんな発音をまねるのは“口が裂けてもいや”という学習者がいるのも事実である。

[ラ行の子音] には英語の [r] もある。通常は[r]は舌先がどこにも触れないのが普通である。たとえば bird, church, word, pearl, door, doctor のような [r] 音は近代期に入って消失した。これは現代英語の不動の特徴であるという。藤井は「carry, very, quarrel, funeral, every など母音間の r は日本語ラ行頭音と同じ弾き音で通用するし、またその r はそっくり落としても通じる」という。さらに「末尾の l や子音の前の l は [u] [ウ]でよいし、初頭の l はラ行頭音でほとんど混乱はない」という。

Gimson によると [r] が [w] で置き換えられ、wed, red タイプの同音異語が作り出されることがあるという。そのような発音は18世紀後半から19世紀初頭まで上流階級の気取った発音であった。今ではこの [w] 音は [r] 音の習得前の子どもにその代用として用いられる。実際 NSE の子どもたちは、rabbit, writeをワビット、ワイトという。どうしても [r]



音をという NNSE の教師は、このように回り道をして教えるといい。

ついでながら英語には摩擦音 [r] が存在する。tree, train, drink, dry は [t], [d] の閉鎖をいったん開いてから、[r] に取り掛かるのではなく、[r] は舌尖を歯茎につけたままで tr, dr は前後 2 音が同時に発音される。そうすると [tr] はチ、[dr] はジとなる。

松本は人類言語の観点から [r] 音を「(外来語を除いて) 日本語では語頭に [r] 音が立たない。これは人類言語に普遍的な傾向の一つの現れ」だといい、「日本語と同じように、流音に [l] と [r] の区別を欠く言語(日本語は [r] 音。その他ほとんどが /l/ 音のみ)は、ユーラシアではその太平洋沿岸部に集中的に現れる」という。

Gimson は「外国人学習者は [r] はどんなものであるかというような偏見を捨てて、[r] をあたかも母音であるかのようにとりかからねばならない」という。英語の [r] 一つの発音の学習に 53 時間以上かかるという調査もある。いずれにせよこの [r] 音は変異音、バラエティがきわめて広い代物で、教授者側の扱いによっては聴くにも話すにもこれほど厄介な発音はない。世界の言語という観点からすれば普遍的でもなく、[l] との区別も欠く [r] 音に、“この発音ができねば英語はあきらめろ”と脅され、発音恐怖症に陥りいまだに回復不能な被害者は、筆者だけにしてほしい。この 1 世紀間も翻弄されてきた日本人は、この辺でぼちぼち反省をしなくてはならないのではないか。それにはある程度の努力も必要だろうが、その前にまず、多くの NNSE 国民のようにひるまず、肩を張らず、自分の OJ を堂々と使いたいものだ。私たち日本人の母語には英語にあるような [r] と [l] の区別がないので、私たち日本人が英語を使うとき重々その点を理解されたい、と胸を張って世界に啓蒙することのほうが、互いに自然なことである。

## F. わたり音

[ワ行の頭音] は英語の [w] 音に類似しているが、数段唇をすぼめる。ワ行の [ワの頭音] のみに残っているため、日本人は wi, wu, we, wo が難しい。日本語の [w] 音は [ウア] の頭音の変種で、「あたし」も「わたし」も同じ意味を持つ。

日本語の拗音 [ヤ、ユ、ヨ] は、英語では [j] と類似している。OJ では cat に [j] を挿入して [kjæt] と発音をすることが多いが、通用度には問題ない。

### (3) 子音の教育的示唆

英語の全音節の 86.9% にも及ぶ閉音節の中でも、日本人にとっては特に NSE の語尾の閉鎖音が聞こえないためにコミュニケーションに大いに不便をきたすことについては再三述べてきた。日本人には map, mat, mac, mad をはじめ、命にも関わりかねない start と

stop や語頭の *freeze* と *please* の区別さえつかないことがある。NSE 同士ならともかく NSE と、あるいは NNSE 同士の間で、特に語尾では丁寧さ、つまり破裂することが最も要求されるべき音である。とはいえ日本人は破裂音として発音する場合でも、通常 NSE のような氣息まで深く伴う気音発声をわざわざしない。日本語の場合でも OJ でも、気音を入れないでも意味の誤解は生じないからであり、あくまでも丁寧さは保っているのである。それ以上強く発音すると外国なまりに聞こえるといわれるのは、逆に英語が強い氣息音を伴う現象を示している。

要は開放音はすべて日本語の発音と大差はないのだから、結論として互いに閉鎖音は開放音(破裂音)にすればいいだけのことである。そうすれば NSE も NNSE も互に通じる。それが日本語発音だけでなく、OJ 発音の一大特徴なのである。藤井は「friend, five, fox などの [f] を [フ] で代用しても、live, have, cave などの [v] を [b] で代用しても、-ng[n] を [-ŋg] としても、was, has が [wɔdz] [hædz] であつてもじゅうぶん通用することは多くの日本人が経験的に知っている」というがまさに至言である。

## V. 理解度を下げる発音

多忙な NSE の間では、日常母語として使う英語は、発音労力の節約や便宜のため、常時音声の消失、わたり音、それに余剰音の発生などがおこる。これは強勢のリズムが弱音節に対してなせるわざ、つまり“しわ寄せ”“いじめ”であり、これこそが聞き取る側、中でも NNSE にとっては大きな障害となり、まさに人泣かせの現象である。

このようなわざわざ理解度を下げるような消極的な音声現象を見極めることなく、文部科学省は英語教育者を通じて学習者たちにそっくりそのまま真似ることを要求してきた。これこそネイティブ指向の表れであり、ネイティブが話す通りに発音しないと英語は伝わらないという流説を、日本の英語教育の世界に広げている(島岡丘2004, 大高2009, 大津2009ほか)。中には学者や教師の中には英語の発音が NSE のそれと似ていないからと言って、人格をも否定するような表現が処々に見られるのは残念なことである。

### (1) 音声の同化・消失など

単語の語尾は時代が進むにつれて同化・消失していったが、概して OE では完全語尾(full ending)の時期、ME では水準化(level ending)、それ以降では消失語尾(lost ending)の時期と呼ばれている。これは英米人のスピード社会への移行とまんざら無関係とは言えないだろう。その好例として、NSE たちは bad と bat の区別を [t,d] 音に先行する母音の長さが違うことで簡単に区別するというが、これは NNSE には大きな無理があることは先に

述べた。

また、子音に挟まれた多くの子音(閉鎖音、摩擦音、流音、鼻音)は消失しやすく、*must go, mostly, next month, asked, Is 'e coming? イズイ カミング? Are ya busy? アーヤ ビズイー? He should've gone. ヒシュダヴ ガン Look at it. ルカッティ*などがそれである。語中でもたとえば [r] 音の消失は日本人には *library* はライバリー(異化)、*price, bright* はパイス、バイトと聞こえる。

また、たとえば子音の後の子音が沈黙となる *asked, handful, must go, prompt* のように、こんなことをしているから結局 *They asked many questions. He called me a taxi.* の動詞は NSE でさえも現在か過去かの時制が分からないので文脈で判断することになる。さらに同音重複を避けるために *ice skate* のように [s] 音を繰り返さないので *I skate* と誤解する。また子音から母音へ移る時、子音の閉鎖が後の母音の開口時まで持続し、*an egg* はアネグ、*in it* は イニト、*get away* はゲタウエイ→ゲタ、*an hour* はアナワーといった動的転置が見られ、*a name [aneim]* と *an +aim [ane:im]* の違い(接続)も紛らわしい。

とはいえたとえば *ed[dʒ]ucation, ocea[jə]n* のような日本語に近いものもあるが、自然にそうなるのはともかく、これをわざわざ練習させ、学習の最初からここまでネイティブのように真似させるのは世界中で日本の英語教育しかない。

Daniel Jones はこうした同化現象などを「*careless* から、また *slovenly* な理由から真似しなくてもいいものもあるが、品のよいイギリス英語に使われるので、せめて聞くことには慣れておくように」「自然の流れとして真似るべき」だと言うが、Gimson は「全般として口語英語では母音、子音ともに脱落するが多いが、外国人学習者はそのすべてをまねる必要はない」という。さらに「核母音の直前の位置で弱母音を省略すること(たとえば *police* の *o* の省略)は早口の碎けた話し方の特徴であって、外国人学習者としては極力避けるべきである」という。

つぎに母音の消失は次のような環境で見られる。速く発音すると *possible* は [pɒsəbl→pɒsbl], *believe* [bili:v→bli:v], *buy it* [bai it→bait] となり、さらには *power* は [pɑ:], *fire* は [fa:] とだらしないべんらめ一調の音となる。その結果、NNSE の聞き手には *to get out* は *together*、*the United States* が *You and I stay*、*next song* が *Nixon* と聞こえる(末延1988)。原因は強勢のリズムと労力節約の法則によるといわれるが、これらの消失は5億人のNSEにとっては何でもないことだが、15億人という多くの聞き取り側のNNSEにとっては大きな障害となる。

さらに Gimson は NNSE の運用能力の目標条件として達成度を低く定めた場合、「NSE の音の脱落や同化の習慣を真似しようとする必要は全くない」という。なぜなら NNSE がそのようにして学習した英語は、「極めて人工的あるいは外国語のように聞こ

えるにしても、NSE にはおおむね理解できる」からである。また、NSE がこれを聞く場合、「自分自身とかなり異なる地域方言を用いる同母語の話し手の話を聞く場合とまったく同様に、自分が身に着けている解釈習慣を調整することが必要だろう」と結んでいる。

要するに NNSE にとっては、カッコがいいからと言ってせめて winter が winner と聞こえたり、picture が pitcher に、それに planter が planner に聞こえるというような、区別がつかない発音だけはやめてほしいものだ。ましてや NSE や日本の英語教師がその代償を逆に NNSE の学習者に真似させるなどというのはとんでもないことである。

従来までは発音誤解の責任は100%NNSE の練習不足にあると思込まされてきた。しかしこのような場合には NSE が NNSE とコミュニケーションをするときには、努めて破裂音も閉鎖音も丁寧に発音するべきである。コミュニケーションの相手とこうして欠けているところをかばい合い、同格に、対等に責任を持ち合うという考え方が育つにつれて、国際英語の道は自ずと開けてくる。

## (2) わたり音など

Far away ファラウエイ, get out ゲタ, last year ラスチャー, kept you ケプチャー, would you ウツジュ, Miss Young ミッシャン, in this case イニスケイス, give me ギンミー, have to ハフタ, cut it out カッティッタウなど口ずさむと、なんとなくアメリカ人そのものになったような気になるらしく、英米礼賛主義者たちの最も好むフレーズの一つであるが、俗語っぽいキザな話し方ともみられ、日本の思春期の中学・高校生の多くは真似させられる前に耳をふさぎ顔を覆いたくなるという。

しかし Kenyon はこうしたつなぎの音は自然の成り行きで、イングランドおよびアメリカ東部の教養ある人々の間では、ごく普通であり、それを否定することは教養人の英語を無視することに他ならないという。NSE 同士のコミュニケーションとしてはごく当然の意見であろう。しかし NNSE の初学者に one hour をワナーと教えると、two hours をトウナワーズと発音する学習者たちが出てくる。楷書の前にいきなり草書を教えるようなもので、変形規則が分からないために応用が利かず危険である。Jenkins はこうした発音について、自然さを保つには不可欠だといわれるが、重要でないし役に立たないと言っている。

先日書店でこんな発音練習本を見つけた。例文の中に「アイクニーレッフュー」を覚えるようにとある。つまり I (アイ) can eat it (クニーレツ) for you (フュー) のことらしい。そこには、「この文は自分自身で発音できないと決して聞き取れない」と書いてある。「決して聞き取れないような発音」をするような人間のことばを聞くことが、そもそもコミュニケーションのためのことばであろうか。脳裏にたえず NSE だけを相手にあこがれるところから、このような思想が生まれる。NSEから少しでも差別されたくない、近づきたい

という一部の日本人特有の涙ぐましい努力が、完璧な発音と文法をマネさせようという気にさせている、という見方も一理あろう。この考え方が危険なもう一つの理由は、学習者がこの文を使って主語や動詞を他のことばに置き換えたいとき、応用が利かない。このようにこの項目の一つとってみても日本の英語発音教育は、つい最近まではイギリス英語の方言でしかなかったアメリカ英語の発音の周りを回る天動説の時代を、いまだ抜け出していないことがわかる。

### (3) 余剰音

わざわざ余分な音を差し挟む、割り込み発音である。Kenyon は割り込みの [r] 音現象として prince→prints, comfort→compfort, something→somepthing, fands, strengkth, The sofa is new. [sofariznju:] を挙げている。母音では弱母音が添加され、filmは [filəm] フィラム、red は [read] レイド、cream は [kəri:m] カリームのように発音される、NSE にとっても耳障りな音である。

ところが日本人が OJ の語尾母音添加をしたり、running をランニングと発音したり、cat を [kjæt] キャットと [j] を挟むと教師は余剰音とみなし厳しく禁止するが、一部の日本人は英米人の余剰音を真似たくなる運命にある。藤井は「余剰音は無教育者だけでなく教育ある人たちの間でもしばしば起こり、一般に容認されている剰音がかなりある」という。だが実際は NSE 内での不注意、俗語っぽいキザな話し方であって、こうした発音を国際英語としてまねさせることは言語道断である。国際英語では互いにこうした発音は極力避けて、誰にもわかるよう明瞭に発音することが求められる。

NSE のこうした子音添加は、早口でしゃべると、或る音から次の音へ渡る時にどうしても通らねばならない道筋としての調音点、音のわたり音を含む一種のやむを得ない余剰音でもあるが、NSE であっても自分たちの母語にさえこうした余剰音を添加していることがわかるだろう。これらは OJ の母音添加にしても、同じ音声法則なのである。しかも OJ の場合は単なる余剰音ではなく、それはむしろ意味をより明瞭にするために丁寧に添加していることが多い。

## VI. 理解度を安定させる発音

### (1) 置換

小栗は「悪い発音練習は、自国語で似ている音を代用すること」だという。しかし Kenyon は「英語国民になじみのない借入れ語の発音はほかの音に置き換えた。…アメリカ人の多くが [ɔ] の代わりに [a] を発音し、…フランス語の [n] は、英米人にはないの

で置き換えたが、これは重要な音声法則である」という。さらに「アクセントのある母音もアクセントがなくなると [i] や [ə] になるがそれは教養人にも現れる。…それは卑俗とは限らない。…これは英語の属するゲルマン語の重要な音声法則なのである」という。

NSEも自分たちにとって困難な発音は、このように「音声法則」として置換していることがわかるだろう。そしてそれは OJ にも当然いえることである。Gimson は「いろいろな地域や世代の発音を混ぜ合わせるような矛盾を避けるべき」であり、「一貫性のあるしゃべり方を」という。日本語発音に類似する英語発音、あるいは英語発音に類似する日本語発音を OJ の発音として一貫して使うことによって、OJ の発音システムが世界中の多くの英語話者に理解され、さらに浸透してゆくのである。

## (2) 添加

NNSE に対して Jones のみならず Gimson も、英語には多数の子音結合があるのでその間に母音を挟まないようにと口を酸っぱくして注意してきたが、NSE たちでさえ実際は Film を [filəm] に、trouble を [trʌbəl] などと発音するような余剰音を多数発しているように、OJ も mild を [maildo] と発音とする傾向が強い。しかしこれは余剰音というより母音添加をすることで明瞭度を増し、意味をよりはっきりと伝えることがその特徴である。それは OJ 発音の一大特徴(末延1992)となっており、Jenkins (2001) も拙著を引用しその効果を認めている<sup>注1)</sup>。こうした OJ の特徴が、アメリカ英語の理解率が55%であるのに対してニホン英語が78%というような結果(末延1988, 2002)を生むことになる。

結論として日本人は「ニホン英語」を駆使してその音声体系を堂々と世界に浸透させることが重要であって、自然なニホン英語を、わざわざ通用度の低い「英米英語」の発音に合わせて発音させ、かえって通用度を下げてしまう負の教育は、まるで世界の時間をすべてグリニッジ時間に合わせようとするような、時代逆行も甚だしい愚行である。

## VII. 結語

コミュニケーションを効果的にするには“口を大きく開けてはっきりと発音した方が聞こえ度がいい”ということに尽きる。英語音声を経史的にみると、古くは人間のコミュニケーションのための音声として最も基本的で、かつ本質的なものを所有しており、その時代のコミュニケーションの単純さと大らかさ、温かさ、豊かさを髣髴とさせるものがあつた。そして偶然かどうかは別として、そのうちのいくつかは私たちのニホン英語の発音の一大特徴として現在、生き生きと写しだされている。

古来、アクセントが自由で、強弱はほとんど日本語と同じく、ほとんど平坦アクセント

であった英語は、時代とともに極端な強弱アクセントに移行したことは述べた。ニホン英語は日本語と同じ高低アクセントを持つが、英語の強弱の位置と軌を一にするため、ニホン英語が一たん高低アクセントから高低リズムへという規則の体系の一つとして認識されるようになる。そうすれば何はばかりなく世界で通用する。そのためにはニホン英語を堂々と使い、世界にその体系の存在を啓蒙することである。

互いの文化の結果としてのこうした強弱・高低アクセントの特徴を、とりたてて再学習させることは負の学習を助長するばかりでなく莫大な時間の不経済であり、それは民族の文化教育という側面からすると越権行為である。

次に英語の母音は古くは強勢のない母音でも別々に明瞭に発音され、日本語のような明瞭な音節を持っていたが、現代英語の発音は母音の多くがシュワー音となって、ついには一部消失した。一方、子音はグループ内ではどれを発音してもたいてい通じてきたが、母音よりも子音が格段に多くなった結果、子音連続とともに閉音節が増加して明瞭度を下げた。このように英語の音節のほとんどは閉音節で終わるので、日本人のみならず世界中の NNSE にとって非常に聞き取りにくいのが、ニホン英語はそれを開音節あるいは母音添加でカバーする。よって英米英語は「子音英語」、ニホン英語は「母音英語」と呼ぶことができる。

このような明瞭な「母音英語」であるニホン英語を、わざわざ不明瞭な「子音英語」に変えようとする教育は、ことばの理解度を下げることの負の教育にはかならない。NSE は今こそ「子音英語」である英米英語がそのままでは国際英語としては通用しにくいことを知るべきであり、同時に NNSE である日本人はニホン英語を通じて「母音英語」の利点を世界に知らしめる役目がある。

最後に冒頭に掲げた音声学者の貢献を讃え、音声教育の将来を見すえた貴重なことばの一部を再度引用して、稿を終えることにする。

Kenyon (1951) 「音声学を学ぶとまもなく、自分と違う発音を非難することを慎み、そういう発音を予期し、敬意をこめた知的な興味を持って聞くようになる。自分の聞いている発音を、言語の発達と行動についての、自然で規則だった法則と関係づけることができるようになる。…よその言葉に対する態度という点で心が広がるばかりでなく、言葉の用法の権威とか標準という問題についても見方が理性的になる。…それを用いるときどれにするかは個人が決めることである。」

藤井(1986) 「日本におけるこれからの英語教育界では、日本語式の発音でも国際的に通じる範囲を見定めて、そのうちのどの範囲までなら学校教育の場に取り入れてよいかを検討してみることも必要になるのではないだろうか。」

Gimson (1980) 「ネイティブと同じ運用能力を身に付けようとすることに特に大きな利

点もないと思っている人、自分の外国人としてのイメージをはっきりと残しておいた方が得策だと思う人もいる。」

音声学者たちのこうした主張は NNSE の側に立ったものであり、職務としての責任を自ら問うという貴重な叙述である。

## 参考文献

- Baugh, A. C. *A History of the English Language*, 1978 (ポー.A.C.『英語史』(第3版)永嶋大典他訳 研究社出版 1981)
- Fries, C. C. *Teaching and Learning English as a Foreign Language*,1954 (C.C.フリーズ『英語の教授と学習』太田朗訳 研究社出版 1957)
- Fry, D. B. *The frequency of occurrence of speech sounds in Southern English*, Archives Neerlandises de Phonetique Experimentale,XX,1974
- Gimson, A. C. *An Introduction to the Pronunciation of English*, 3<sup>rd</sup> edition, Edward Arnold Ltd.,London,1980, (Gimson『英語音声学入門』竹林滋訳 金星堂 1983)
- Jenkins, J. *The Phonology of English as an International Language*, Oxford University Press, 2001
- Jacobson, R. *Aphasia and Linguistics*, 服部四郎訳 岩波書店 1976
- Jones, D. *An Outline of English Phonetics*, B.G.Teubner, Leipzig, 1932
- Kenyon, J. S. *American Pronunciation*, 1951 (J. S. Kenyon「アメリカ英語の発音」竹林滋訳 大修館書店 1973)
- Pike, K. *The Intonation of American English*,1945
- Sweet, H. *The Sound of English*,1908
- 藤井 健『現代英語発音の基礎』研究社出版 1986
- 高本捨三郎「日英両語の音体系の比較と英語発音教育」(英語教育協議会編)『英語と英語教育』所収 ELEC 研究社出版 1965
- 牧野 勤「日英語の発音の比較」(英語教育協議会編)『英語と英語教育』所収 ELEC 研究社出版 1965
- 松本克己『世界言語のなかの日本語』三省堂 2007
- 岡村光浩「神戸芸術工科大学における英語教育について一現状と展望」『芸術工学』神戸芸術工科大学紀要 2009
- 小栗敬三『英語音声学』篠崎書林 1969
- 小野隆啓『英語の構造』(発音の部)金星堂 2012
- 大高博美「油断大敵な英語の鼻音」『英語教育』2009 8 月
- 大津由紀雄編著『危機に立つ日本の英語教育』慶應義塾大学出版会 2009
- 島岡 丘『日本語からスーパーネイティブの英語へ』創拓社 2004
- 末延岑生他「日本人の英語」『人文論集』31-1 神戸商科大学経済研究所 1995
- 末延岑生「ニホン英語」本名信行『アジアの英語』くろしお出版 1991
- 『ニホン英語は世界で通じる』平凡社新書 2010
- 「ニホン英語(*Open Japanese*)をデザインする」『芸術工学』神戸芸術工科大学、2011
- 「ニホン英語(*Open Japanese*)の類型化研究(形態編)ーアジア英語(*Open Asian*)を礎として」『芸術工学』神戸芸術工科大学 2012.11



- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究—統語編 (語順)」『人文論集』 兵庫県立大学 2013
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究—統語編 (時制)」日本「アジア英語」学会 2013
- Suenobu, Mineo *et.al* Listening Comprehension and the Process of Information Acquisition by Non-Native Speakers of English. *International Review of Applied Linguistics (IRAL)* 34-3 Julius Groos Verlag, Heidelberg 1986
- An Experimental Study of Intelligibility of Japanese English. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*. 30 (2) pp. 146-156, Julius Groos Verlag, Heidelberg. 1992. 5
- Information Transmission of English by Japanese Learners of English. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*. 35 (3), Julius Groos Verlag, Heidelberg, 1997. 8
- Suenobu, Mineo *Errorology in English*, 740 pp. (bind copy), Yugetsu Shobo Kobe 2002.11.
- *From Error To Intelligibility*, Kobe University of Commerce, 199 pp. Yugetsu Shobo Kobe 1988.8.
- *Communicability within Errors*, KUC Monograph LII, IE Research, Kobe University of Commerce, Kobe. Yugetsu Shobo Kobe 1995
- *Japanese English—A Study of Japanese Learners' Simultaneous Interpretation*, KUC Monograph LX., Kobe University of Commerce, Yugetsu Shobo Kobe, 279 pp. 1999. 3.
- *Pathology of English Teaching in Japan*, KUC Monograph LXVIII, Kobe University of Commerce, 226 pp. Yugetsu Shobo Kobe 2003.3.
- *The Preparation Theory of the Origin of Language*, UH Monograph LXXVI, The Institute of Economic Research, University of Hyogo, Kobe, 230pp. 2006.3.
- 角田太作『世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語』くろしお出版 2009
- 山田雄一郎『日本の英語教育』岩波新書 2005
- 矢野安剛『英語世界のことばと文化』成文堂 2008

注1) 筆者は2003年に Jenkins 女史と対話をする機会をもったが、その時、「私たち NSE は今まで母語としての英語を絶対的なものとして、そのまま国際的に適用させることばかりを考えてきましたが、ニホン英語の論文 (末延1986) と著書 (末延2002) を読んで、NNSE も NSE も共に最も理解しやすい英語とは何かを求めべきだと考えるようになりました」と述べた。

注2) たとえば晩年の K. Pike との私信 (1989–1997) では、彼は NNSE としてのニホン英語の音節、リズム、発音、文体についても認めているように思えるのでその一部を紹介する。

I strongly support your point of view “that it is the intelligibility that is the most important in dealing with students’ errors.” We do indeed need to encourage students to communicate, even when there may be grammatical errors involved. (Regardless of how well we teach them, there is certain to remain some small degree of “accent” and a few grammatical errors add to that identification of a person as a foreigner, but are not necessarily greatly important in terms of intelligibility.